

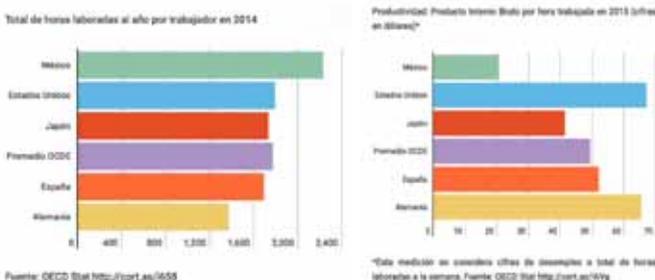
1. ラテンアメリカ基礎知識の話

1・5 「労働とお祭り」

*労働に関する先入観

中南米の人はあまり働かないのではないかという先入観を、私たち日本人は持っているかもしれない。正しくもあり間違いでもあると考える。といっても「働き者・怠け者」を測定することは労働時間や生産性などの理論があり、かなり専門的になってしまう。地域や国に関係せず怠け者や働き者は存在するだろう。しかしながら、私自身の反省を告白すると、以前、私も、ラテンアメリカ人達を偏見に近い見方をしていた。「働かない」というステレオタイプの考えを持っていた。実際に、コロンビアやブラジルでの現地在在を体験した結果、現地の方の働きぶりを目の当たりにし狼狽(うろた)えてしまった。「彼ら(現地の人)はそんなに怠け者ではない、むしろ働き者ではないだろうか」と考えを改めた。例外もあるだろうが、私は言い切る。「中南米人は朝起き・働き」であると。

たとえば子供たちの学校の時間割は私立、公立の違い、また学校にもよるだろうが、コロンビアのカリ市では午前7時から始まるころが多い。終わるのは午後2時前後である。朝は午前5時半には家を出ないと間に合わない。早起きである。子供たちの学校登校の時間、午前6時にはスクールバスが行き来している。出張所の前の建築工事は朝の6時から始まる。しかしなかなか完成しない。これは生産性と労働時間との関係による。経済協力開発機構のデータで、目についたのは労働時間の長さのトップがメキシコであることだ。2番目が韓国、3番目がチリと続く。中でも注目されるのが、労働時間と生産性の関係である(グラフ1、2参照)。



グラフ1「2014年の年間労働時間の比較」 グラフ2「生産性：2015年の労働1時間当たりのGDP(国内総生産：USドル)」
メキシコ、米国、日本、OECD諸国の平均、スペイン、ドイツ
出典：Mónica Cruz, ¿Por qué son tan largas las jornadas laborales en México? EIPAI.S, 28 Junio 2016. https://verne.elpais.com/verne/2016/06/28/mexico/1467068875_552344.html

この二つのグラフからわかることは、働いているのにその生産性が追いついていない、すなわち生産性が低いということだ。日本も生産性が低いということは今までも問題にされている。ただ、メキシコの労働時間の多さについて、あるコメントがありいかにもラテンアメリカ的であった。「歴史的にメキシコ労働者はいつも、労働者から搾取するために渡ってきた外国人や地主・農場主(雇用者)や外国人の命令に従ってきたからである⁽¹⁾」。だから労働時間が長いとは限らないだろうが、命令に背くことは出来なかった。

フェスタ：お祭り

さて、労働があれば、余暇があり娯楽は付きものである。ダンスや音楽はもちろんスポーツ、ゲームも存在するが、ラテンアメリカ名物「お祭り」をあげたい。メキシコからアルゼンチンまでのラテンアメリカや非ラテンのカリブ諸国を含めて「お祭り：フィエスタ」が好きだ。ラテン的生活に言及するなら、この「フィエスタ」は外せない。個人

的な誕生日や結婚式も一つのフィエスタ的イベントである。

スペイン語でお祭りの意の「Fiesta フィエスタ」と同義のポルトガル語での「フェスタ」という単語は、日本ですでに「市民権」を獲得しているように思う。たとえば「花フェスタ」や「スポーツフェスタ」などとよく聞いたり、見たりする。ラテンアメリカでは、小さな村でもそれなりのお祭りがある。昨年3月、コロンビア第4の街、カリブ海岸に位置するバランキージャ付近の集落で「梅祭り」に出くわした。「梅文化もコロンビアにあるのだ」と感心した。

*ラテンアメリカのお祭り

コロンビアのお祭りにはそれぞれ意味がある。日本では、地方の祭りは秋祭りに代表され、農業と深く結びついて、収穫への感謝や祈願をする行事というのが良く言われる。コロンビアの「フィエスタ」は宗教的な意味合いもあるが、非日常的な行事である。彼らは特に、非日常的なことにもものすごく反応する。日常から逸脱するのが好きなのである、ということかもしれない。簡単に言えば、「お祭り好き」。だからコロンビアだけで年間3,000以上のお祭りのイベントが存在すると言われている。あまり数多くあれば、非日常でなくなるのではないかと、とも思うが……反対に毎日コツコツやる日常は苦手なのである。だから、とは飛躍し過ぎるかも知れないが、ラテンアメリカでは「貯蓄」が続かない。発想することも稀である。メキシコのノーベル賞作家であるオクタビオ・パスは「お祭りには、特別な決まりが存在する。それはお祭りを浮き立たせ、例外日を作り出す。そしてある論理や道徳が入ってくる。それらは日常のそれらとはしばしば矛盾し、経済の範囲までも関係してくるのである⁽²⁾」。

また、スポーツの祭典というのも、「フィエスタ」的価値観があるのではないかと考える。例えば、サッカーのワールドカップ、南米カップ、クラブチームカップなどの「サッカー現象」がコロンビアでは2014年のワールドカップブラジル大会から今年2019年も未だに続いている。「続いている」というのは、コロンビア代表の試合があるときは、道行く人々、老若男女を問わず、代表チームのユニフォームを着ていて、街中が黄色になる。タクシー、バスの運転手さんも着ている。サッカーに詳しくない人でも街を眺めるだけで「あ、今日、コロンビア戦があるのか」と分かるくらいである。そして勝てば熱狂、負ければ静寂な国になるからだ。

ラテンアメリカのお祭り行事には、先ほどの非日常という意味があると共に、多様性の表現、多様な文化のお祝いを表現する役割もしている。日本においては三大祭りがあるように、コロンビア国内はもとより海外からも多くの人々が訪れる「コロンビア五大祭り」がある。その一つにコロンビア南部、エクアドルとの国境近くのパストという街でおこなわれる「黒人・白人のカーニバル」がある。ユネスコの文化遺産にも登録されている黒人奴隷を起源に持つカーニバルだ。このお祭りの特徴は、色々な社会的な区別や人種、経済格差もある人たちが「同じサロン」で祝うことで、ここには人間関係の別の価値観がみられるのである。

[註]

(1) Mónica Cruz, ¿Por qué son tan largas las jornadas laborales en México? EIPAI.S, 28 Junio 2016. https://verne.elpais.com/verne/2016/06/28/mexico/1467068875_552344.html
(2) ¿Las fiestas de Colombia? Semana, 14 Febrero 2005. <https://www.semana.com/on-line/articulo/las-fiestas-colombia/70808-3>
(3) 同上